北京日本学研究中心

通　　讯

《第十二号》

责任编辑：山下纪久枝　谯　燕　邮政编码:100081　Tel:8422277--584　1991.6.15

就任寄语

主任教授　佐藤　保

4月29日，姗姗来迟地到达了柳絮纷飞的北京，承户川前任主任教授之后，走马上任于北京日本学研究中心。在这之前，户川先生曾一再催促，问我能否及早来京。然而，无奈在日本诸多的公与私事务缠身，不得动弹。好不容易挣脱开后，来到北京，等待我的果然是堆积如山的工作。倏忽之间，一个多月已过。其间，我尝试着改变以往夜间工作到很晚的生活习惯，以适应早上班的中国生活。

关于“中心”的工作，早在赴任前就自认为了解了不少。然而，对其中之实情，如不亲身经历，很难有切身的体会。真可谓“百闻不如一见”。原以为在日本已了解了的东西，有不少与实际不相符合。

坦率而言，随着对进入第二个五年计划的本“中心”事业的具体内容及“中心”情况的逐渐了解，我深感任务之艰巨，责任之重大。不过，我的职责十分明了，即以日本国际交流基金与中国国家教育委员会达成的协议为基本大法，为了“中心”的切实发展，和中国方面进行协商，具体地开展工作。我将吸收以往日中双方诸位前辈苦心积累的成果，在此基础上不断探索更为切实可行的发展途径，并为此贡献我菲薄的一份力量。仰仗诸位的鼎力协助。

（羌国华译）

☆　简　讯　☆

△5月24日下午，日本·外务省文化代表团访问了“中心”，参观了研究生的「日中文学·文化比较研究」课（佐藤保教授）和进修班的「文章表现研究B」课（山下）。

△5月25日，“中心”日方派遣教师去承德进行了2日的旅游。参观了避暑山庄、外八庙等。虽途中遇雨，但这仍不失为一次有利于理解中国的有意义的旅行。

△5月30日，日本·图书馆情报大学藤野幸雄教授、同大学研究生伊香佐和子女士来华。此次来华的目的是为了指导本“中心”图书资料室的图书编目及整理工作。就新图书资料室的使用方法等，藤野教授提出了切实可行的建议。藤野教授已于6月5日回国，伊香女士将逗留到十月底，进行编目工作。

△5月30日、31日，第6期研究生分成四个专业进行了第一次中间发表会。

△6月1日，第4期研究生班学员论文提交截止。共21名提交了论文。

△6月3日，第6期进修班全体学员（30名）提交了结业论文。

公开讲座・杂感

※第六次「国语教育における言语教育の现状」　甲斐　睦朗先生

作为国语教育专家，围绕着国语教育全领域，既详细又易懂地讲述了国语教育的现状，对将来的展望以及所存在的问题。他那和蔼的表情和富有幽默的语言，引起了全场的热烈鼓掌和快活的笑声。　（教师进修班　朴正龙）

※第七次「日本の公と私」　田原　嗣郎先生

田原先生从人类社会始终存在的“公”与“私”的关系着眼，深刻分析了国际社会中日本民族的独特性格。作为初学者再次感受到先生学识之渊博，洞察力之敏锐。

（文化一年级　徐　蕾）

※第八次「汉文训读の变革について」　村上　雅孝先生

村上先生的讲座似乎很难。但是，每当先生提及的内容与自己知道的东西相吻合时，那种激动的心情无法形容。　（语言一年级　孙建军）

※第九次「稻のまつり　－アジアの村村を访ねて－　」　杉山　晃一先生

我们每天吃的大米里宿着精灵，并且它是随季节移动的。先生利用实地调查的资料，通过比较分析给我们介绍了关于稻作礼仪的文化。通过讲座，我们对文化人类学的方法论有了更深的理解。先生不愧为文化人类学家。　（文化一年级　李志勇）

关于进修班的访日研修

第６期进修班学员（９０级）将于６月１９日到７月１８日赴日进行为期一个月的访日研修。去年度以前都是在２月份进行访日研修，而今年度是在结业论文、学期期末考试都完成以后进行。这次的访日研修，可以说是把在本“中心”十个月来所学到的东西进行总结，以切实的亲身体会加深对日本的理解的好机会。主要日程如下：

６月１９日～７月２日　在国际交流基金・日本语国际中心(埼玉县北浦和)逗留。

①观看茶道、插花等日本传统文化的表演、歌舞伎等。

②参观浅草、东京塔、东京证券交易所、ＮＨＫ、日本经济报社等。

③听日本语国际中心京极纯一所长及其他诸位先生的讲座。

④在埼玉县内进行民宿活动等。

７月２～７月１６日　研修旅行

旅行的目的地为，箱根、京都（包括参观奈良市内）、广岛、岐阜、高山、滨松。其间，除参观各地的名胜古迹外，还预定访问同志社大学、参观教育机关（大・中・小学）、工厂等。

〔通訊・日本語版〕

着任のご挨拶

主任教授　佐藤　保

4月29日、遅ればせながら柳絮の乱れとぶ北京に到着、戸川前主任教授の後をうけて北京日本学研究センターに着任しました。戸川先生から、もっと早く来られないかと再三お叱りを受けましたが、日本での公私の仕事に身動きもならず、ようやくそれらを振り切って北京に着いてみれば、やはり待ち受けていたのは仕事の山、朝の早い中国にこれまでの夜型の生活を朝型に切り替えるのに苦労しつつ、一ヵ月余りを過ごしました。

センターの仕事については、赴任前に十分に承知して来たつもりですが、なにごとも現実に経験してみないとなかなか理解できないものです。まことに「百聞は一見に如かず」で、日本で理解していたはずのことが実際と食い違っている点も少なくありません。

正直なところ、第2期5カ年計画に入っている本センターの事業の具体的な内容、またセンターをとりまく状況等が次第にわかってくるにつれて、これは容易ならざる任務といまさらながら責任の重大さを自覚しています。ただ、わたしの職務はきわめて明瞭で、日本国際交流基金と中国国家教育委員会との間に取り交わされた協定を憲法にして、本センターの充実発展のために中国側と協議しながら具体策を推進していくことです。これまで日中双方の諸先輩が苦心して蓄積された成果を尊重しつつ、さらにより充実の方途を探るために微力を尽くしたいと考えています。ご協力よろしくお願いします。

ニュース

☆5月24日（金）午後、日本・外務省文化ミッションが本センターを来訪し、大学院コースの「日中文学・文化比較研究」（佐藤主任教授）、研修コースの「文章表現研究B」（山下）の講義を参観した。

☆5月25日から1泊2日の日程で、本センターの日本側派遣教師が承徳へ小旅行をし、避暑山荘、外八廟などを見学した。途中、雨に降られたり、バスのトラブルがあったりしたが、中国理解に役立つ有意義な旅行だった。

☆5月30日、日本・図書館情報大学の藤野幸雄教授、同研究生伊香佐和子氏が来華した。今回の目的は、本センターの図書資料室の目録作成、図書整理指導等であり、新しい図書資料室の使用法等についても、藤野教授に適切なアドバイスをいただいた。藤野教授は6月5日帰国したが、伊香氏は10月まで滞在し、目録作成を担当する。

☆5月30日、31日に大学院第6期生は各専攻ごとに第1回中間発表会を行った。

☆6月1日、大学院第4期生の修士論文提出締切日であった。21名が論文を提出した。

☆6月3日、研修コース第6期生（30名）は全員、修了小論文を提出した。

公開講座・雑感

♡第６回「国語教育における言語教育の現状」　甲斐睦朗先生

国語教育専門家として国語教育全般をめぐって、その現状と将来への展望及び問題点を詳しく、わかりやすく述べられた。その優しい表情とユーモアあふれる言葉づかいは満場の熱烈な拍手と朗らかな笑い声を引き起こした。　（研修コース・朴正龍）

♡第７回「日本の公と私」　田原嗣郎先生

田原先生は人間社会にあくまで存在する「公」と「私」の関係にスポットライトを当てて、国際社会における日本民族の独自な性格を深く分析なさった。初心者として、先生の学識の豊かさや洞察力の鋭さにあらためて感服した。　（文化１年・徐蕾）

♡第８回「漢文訓読の変革について」　村上雅孝先生

村上先生の講座は難しく感じられましたが、先生のおっしゃったことが、自分の知っていることとぴったり合った時には、この上なくうれしく思いました。

（言語１年・孫建軍）

♡第９回「稲のまつり ―― アジアの村々を訪ねて ―― 」　杉山晃一先生

私たちが毎日食べている米 ―― 稲には精霊が宿っていて、その魂は季節にしたがって移動している。実地調査資料を用いながら、先生は比較文化論的な視点から稲の祭りの文化を紹介してくださった。さすがに文化人類学者だなと感服した。

（文化１年・李志勇）

研修コース訪日研修について

研修コース第６期生（90年級）は、６月19日から７月18日までの１ヵ月間、訪日研修を行う。昨年度までは２月に訪日研修が行われていたが、本年度は修了小論文、後期期末試験等をすべて終えての訪日となった。今回の訪日研修は、これまで約10ヵ月間本センターで学んできたことを総括し、実際に身をもって日本理解を深めるよい機会と言えよう。主な日程は以下の通りである。

６月19日～７月２日　国際交流基金・日本語国際センター（埼玉県北浦和）に滞在。

①茶道、生け花等、日本の伝統文化のデモンストレーション、歌舞伎見学など。

②浅草、東京タワー、東京証券取引所、ＮＨＫ、日本経済新聞社等の見学。

③日本語国際センター京極純一所長ほか諸先生方の講義。

④埼玉県内におけるホームステイなど。

７月２日～７月16日　研修旅行

旅行先は箱根、京都（奈良市内見学を含む）、広島、岐阜、高山、浜松。この間には各地の名所旧蹟見学のほか、同志社大学訪問、教育機関（小・中・高校）の見学、工場見学等が予定されている。

第３次日本学中日研讨会（青年研讨会）
简　报

开幕式

开幕式从６月７日（星期５）上午８点３０分开始，在北京日本学研究中心一层阶梯教室举行。参加开幕式的有，中国国家教育委员会国际合作司亚非处处长朱小玉女士、北京外国语学院王福祥院长、日本驻华大使馆一秘新井达夫先生、北京日本学研究中心协力委员・特别讲演讲师秋山虔教授、特别讲演讲师村井康彦教授等诸位来宾。陈海良副主任主持了开幕式，王福祥院长、佐藤　保主任教授、李书成副主任致了开幕词。

分科会

６月７日上午到６月８日上午，召开了１０个分科会，共计３６人次发表了论文。发表者是以本“中心”的研究生班、进修班毕业生为主的年轻的研究者，他们的发表比预想的更好。（其中有研究生班毕业生２１名、进修班毕业生１５名。研究生班毕业生中包括客座研究员。）

参加各分科会的听众有２５～５０名以上，除本“中心”学生、北京市内日本学有关人员、出版方面有关人员以外，也有从天津赶来的听众。发表后的提问、讨论非常活跃。其充满青春气息的气氛，和“青年研讨会”这个副题很为吻合。

中国的『人民日报・海外版』、日本的『每日新闻』记者前来进行了采访，并在６月１１日的『人民日报・海外版』上刊登了有关本次研讨会的详细报道。

此次的分科会，由“中心”日方派遣教授担任主席，客座研究员、研究生班毕业生担任副主席。以下举出几例各主席的感想。

☆在发表中，能感觉到有些学员研究方法妥当，具有优秀的素质，很有前途。但是，从整体上说，在水平上高低差距很大，有些学员没有充分地学习现有文献。这是今后的课题。

☆有些人不习惯口头发言。特别是在２０分钟这样一个有限的时间要充分表达自己的思想，必须进行很好的概括。这次，虽请发表者同时提交了８０００字～１２０００字的论文，但不能在发表时说，「关于这点，论文中已写了。」必须使发言成为一篇完整的东西。在读原稿的时候，应以一分钟３００字为标准。也不能说得过快。

☆“中心”在学的学生也积极地参加了讨论。听前辈们的发言，对学生们来说，是一个很好的学习机会。

〔日本语学Ⅰ〕发表者为王束葵、刘尚纯、刘铭杰、张麟声4人。多以「中日～」为题发表、引起了听众很大的兴趣。从张麟声氏的发表中能感觉到其今后的发展潜力。

〔日本文学Ⅰ〕发表者为羌国华、刘迎、刘杰秋3人。羌国华的发表在时间掌握上稍稍欠妥，但内容充实、调查周密。

〔日本文化Ⅰ〕发表者为龚颖、刘克申、李筱平、王铁桥4人。也许因是儒教方面的发表，提问等稍欠活跃。龚颖氏的发表概括性较好。

〔日本社会Ⅰ〕发表者为曲枫、肖传国、宋国忠3人。他们各自叙述了妥当的、值得注目的见解，提问也很踊跃，讨论一直延续到会议结束时。

〔日本语学Ⅱ〕发表者为刘宗和、钱红日、于日平、王志英、王铁桥5人。于日平的发表很出色，但对于20分钟的发表来说，范围过于广泛。

〔日本文学Ⅱ〕发表者为邱嶺、王成、张明杰、江新风4人。邱嶺、王成两氏具有出色的把问题点进行逻辑性整理的能力，与会者积极地进行了水平相当高的议论。

〔日本文化Ⅱ〕发表者为王勇、张景翔、王宝平3人。3人的发表都准确地依据资料、文献等，并进行了有根有据的考察，是高水平的。

〔日本社会Ⅱ〕发表者为董莉、谢志宇、徐建华、张忆杰4人。因是关于经济、现代化，听众很感兴趣。张忆杰氏的问题意识明确，发表也有概括性。

〔日本文学Ⅲ〕发表者为吴惠淑、张伟、马朝红3人。张伟氏发表的内容有深度。马朝红氏对作品的分析很精采，并采用了最近的研究方法。

〔日本文化Ⅲ〕发表者为林明鲜、张敏、张国华3人。有必要更深入地进行文化史方面的考察、分析。听众们对他们提出的一些问题很感兴趣，此分科会聚集了50名以上的听众。

特别讲演会、闭幕式

从6月8日下午一点开始到五点，在北京外国语学院（东院）电教中心2层的国际会议厅举行了特别讲演会。村井康彦先生（国际日本文化研究中心教授）、万峰先生（中国社会科学院世界历史研究所研究员·教授）、秋山虔先生（东京女子大学教授）、刘德有先生(中华日本学会会长·教授)作了讲演。听众近160人，讲演会出现盛况。讲演会后，在国际会议厅继续举行了闭幕式，研讨会委员会山田等委员长致了闭幕词。

恳谈会

6月8日下午6点，在香格里拉饭店举行了恳谈会。中国国家教育委员会国际合作司于富增司长、日本驻华大使馆野坂康夫参赞、北京外国语学院王福祥院长致了词。“中心”李德主任提议干杯。出席恳谈会的还有其他许多来宾。恳谈会气氛融洽，与会者们在此度过了一个愉快的夜晚。

第３回日本学中日シンポジウム
（青年シンポジウム）　特報

開幕式

６月７日（金）午前８時30分から、北京日本学研究センター１階階段教室において、開幕式が行われた。開幕式には、中国国家教育委員会国際合作司アジア・アフリカ処朱小玉処長、北京外国語学院王福祥院長、在中国日本大使館新井達夫書記官、北京日本学研究センター協力委員・特別講演講師秋山虔教授、特別講演講師村井康彦教授ほか多数の来賓の方々が参加された。陳海良副主任の司会により、王福祥院長、佐藤保主任教授李書成副主任がそれぞれ開幕の辞を述べた。

分科会

６月７日午前から６月８日午前にかけて10の分科会が開かれ、合計36の発表がなされた。発表者は本センターの大学院コース、研修コースの修了生を中心とした若手の研究者で、それぞれ予想以上にまとまった発表がなされた。（大学院コース修了生21名、研修コース修了生15名。なお大学院コース修了生には客員研究員を含む。）

各分科会に参加した聴衆は25～50名以上で、本センター在学者、北京市内の日本学関係者、出版関係者等のほか、天津等からの参加者も見られた。発表後の質疑・討論も活発に行われ、まさに“青年シンポジウム”というサブ・タイトルにふさわしい若々しい雰囲気であった。

また、中国の「人民日報・海外版」、日本の「毎日新聞」の各記者が取材に見え、６月11日付「人民日報・海外版」に、当シンポジウムについて詳しい記事が掲載された。

今回の分科会では、本センター日本側派遣教授が座長を、客員研究員・大学院コース修了生が副座長をつとめた。以下に各座長の感想をいくつか挙げておきたい。

☆発表の中には、研究方法がしっかりしており、将来性のある優れた資質が感じられるものがあった。しかし、全体としてはまだかなりレベルに差があり、先行文献を十分に踏まえていないものも見られた。今後の課題である。

☆全体的に口頭発表に慣れていないようだった。20分という限られた発表時間の中でうまくまとめる工夫が必要である。原稿を読む場合、１分間３00字が目安である。早口になりすぎないよう注意。発表者には8000字～12000 字の論文を今回同時に提出してもらったが、発表の時に「それについては論文に書いてあります」というのは通用しない。あくまでも口頭発表自体を完結したものとする努力が必要である。

☆本センターの在学生も積極的に討論に参加していた。先輩たちの報告を聞くことは在学生にとって大変よい勉強になったと思う。

〔日本語学Ⅰ〕発表者は王東葵、劉尚純、劉銘傑、張麟声の４氏。「中日～」という発表が多く、聴衆の関心が高かった。張麟声氏の発表は今後の発展性が感じられた。

〔日本文学Ⅰ〕発表者は羌国華、劉迎、劉潔秋の３氏。羌国華氏の発表は、時間配分にやや問題があったが、内容が充実しており、調査も行き届いていた。

〔日本文化Ⅰ〕発表者は龔穎、劉克申、李筱平、王鉄橋の４氏。儒教関係の発表が集まっていたためか、質疑はやや盛り上がりを欠いた。龔穎氏の発表はまとまっていた。

〔日本社会Ⅰ〕発表者は曲楓、肖伝国、宋国忠の３氏。それぞれ妥当な見解、注目すべき見解を述べ、質疑も盛んで、時間いっぱいまで討論が続いた。

〔日本語学Ⅱ〕発表者は劉宗和、銭紅日、于日平、王志英、王鉄橋の５氏。于日平氏の発表は優れていたが、20分間で取り扱うには範囲が広すぎた。

〔日本文学Ⅱ〕発表者は邱嶺、王成、張明傑、江新鳳の４氏。邱嶺、王成両氏は、問題点を論理的に整理する力に優れており、かなりレベルの高い議論が熱心に行われた。

〔日本文化Ⅱ〕発表者は王勇、張景翔、王宝平の３氏。３氏ともに資料・文献等をきちんと踏まえて実証的に考証したもので、レベルの高い発表であった。

〔日本社会Ⅱ〕発表者は董莉、謝志宇、徐建華、張憶傑の４氏。経済、近代化については聴衆の関心が高かった。張憶傑氏の問題意識は明確で、発表もまとまっていた。

〔日本文学Ⅲ〕発表者は呉恵淑、張偉、馬朝紅の３氏。張偉氏はよく読み込んでおり、高度な内容だった。馬朝紅氏は作品分析が見事で、最近の研究法も使い込んでいた。

〔日本文化Ⅲ〕発表者は林明鮮、張敏、張国華の３氏。文化史的な考察、分析をさらに深める必要がある。全体的に関心はかなり高く、50名以上の聴衆が集まった。

特別講演会、閉幕式

6月8日午後1時から5時まで、北京外国語学院（東院）電化教育中心2階の国際会議庁において特別講演会が行われた。村井康彦先生（国際日本文化研究センター教授）、万峰先生（中国社会科学院世界歴史研究所研究員・教授）、秋山虔先生（東京女子大学教授劉徳有先生（中華日本学会会長・教授）に、ご講演いただいた。160 名近くの聴衆が集まり、講演会は盛況であった。講演会終了後、国際会議庁において引き続き閉幕式が行われシンポジウム委員会山田等委員長が閉幕の辞を述べた。

懇親会

6月8日午後6時からシャングリラホテルにおいて懇親会が開かれ、王福祥院長、中国国家教育委員会国際合作司于富増司長、在中国日本大使館野坂康夫参事官にご挨拶いただき、本センターの李徳主任が「乾杯」の音頭を取った。ほか多数の来賓の方々にご出席いただいた。懇親会は和やかな雰囲気で、若手の発表者たちも楽しいひとときを過ごした。